

## 日本語母語話者による英語音声の聴解判断

犬塚 博彦

### 1. はじめに

本稿は、日本語母語話者による英語音声の聴解プロセス研究の一環として、筆者が勤務する岩手大学教育学部で、平成 21 年度前期の「英語音声学演習 I」の履修学生を対象に行なったリスニング実験の結果と、その後、履修した学生たちに取り組んでもらった各自の聴解判断に関するレポート内容を分析することにより、英語音声の聴解プロセスを質的観点から考察し、あわせて聴解プロセスのモデル化を試みる際の視点を浮き彫りにすることをその目的とする。

### 2. リスニング実験

#### 2. 1. 音声資料

今回の実験は、犬塚(2009)で明らかになった日本語母語話者による英語音声の聴解の傾向に関して、より多くの事例にあたって追調査するという意味合いから、犬塚(2009)の調査で行なったものと同じ音声資料を使用することとした。

\* 「ディクテーション」および「テープおこし」の素材とした音声資料

- 01) We enjoyed ourselves at the party.      02) I don't agree with you.  
 03) He arrived here last night.      04) I left early so as to avoid heavy traffic.  
 05) He cannot have accepted your plan.      06) He won't listen to our advice.  
 07) The children appeared to be happy.  
 08) You should avoid eating just before you go to bed.      09) I'll give it a try.  
 10) It is essential that you should follow the doctor's advice.  
 11) I advised her not to go there.

(資料：石黒昭博『Forest音でトレーニング』(桐原書店、2007)4-22頁から抽出した英文。) (犬塚2009:67)

#### 2. 2. 実験方法

実験方法は犬塚(2007b)においてすでに確立している方法を踏襲し、基本的には犬塚(2009)と同じやり方で行なった。その要点のみ以下に示す[犬塚(2009:68)]。

岩手大学教育学部英語教育科で平成21年度前期「英語音声学演習 I」の履修者18名(2年生)を対象に上記英文の音声資料を用意し、「ディクテーション」と「テ

テープおこし」の二つの段階に分けての実験を行なった。このうち「ディクテーション」については、(1)テープの音声を一度聴くたびごとにそれを書き取るという形で、一つの英文について3回連続して行なったこと、(2)書き取りの用紙には1回目から3回目まであらかじめ別々の欄をもうけて、後で聴解のプロセスが把握できるような形で実施したこと、(3)筆記用具はボールペンを使用することとし、すでに終わっている箇所については遡って書き直すことは禁止とし、書き取ったものは終了時にその場で提出をしてもらったこと、である。また、「テープおこし」については、上記実験が終わった後の一週間を取り組み期間とし、「ディクテーション」と同じ内容のテープを、それぞれの学生がみずから何度も聴き直しながらそれを文字に書き起こす作業に取り組んでもらい、英文に加えて、カナ表記と日本語の意味も書いてもらうことにした。両者の取り組みを合わせて平成21年4月から5月にかけて実施した。さらにその後、学生たちには、レポート課題として、リスニング実験の際に聴解エラーが生じて間違っ書き取ってしまった箇所について、なぜそのように聞こえたかと思ったのかということについて、各自でその聴解判断について分析してもらい、平成21年7月に前期末レポートとして提出してもらった。本稿における考察は、その学生たちに提出してもらったレポート内容の分析をもとに行なうものである。以下の分析と考察において提示したそれぞれの英文に続く部分は、①②③が「ディクテーション」でそれぞれ1回目・2回目・3回目、④が「テープおこし」における調査結果を示すものとする。

### 3. 分析と考察

#### 3. 1. We enjoyed ourselves at the party.(文例01)

まず、文例01)について、学生たちが書き取ったものの中から、英語音声の聴解プロセスのしくみを考える際に有力な資料となると思われる事例について取りあげることにする。文例01)のリスニングにおいて、学生たちが書き取ったものを調べてみると、以下に《事例1》として示すように偶然にも3回のディクテーションにおいて全く同様の聴き取り方をした学生が2名(学生A・B)いた。

《事例1：学生A・Bの場合》

01)We enjoyed ourselves at the party.

①\*We enjoyed \_\_\_\_\_ at the party.

②\*We enjoyed ourself at the party.

③ We enjoyed ourselves at the party.

④ We enjoyed ourselves at the party.

《事例1》における学生A・Bの聴解においては、犬塚(2005a:63-65)および犬塚(2008a:87)で触れたように、発話の冒頭と末尾の部分で聴解精度が高いという、これまでの調査で明らかになった傾向がここでも見られたのであるが、ここでは文の中間に位置する“ourselves”の聴解プロセスを取り上げることにしたい。

《事例1》では、“ourselves”の箇所が、①では聴き取れておらず、②では“\*ourself”のように誤った形で受けとめ、そして③で正しく“ourselves”と聴き取っている。学生Aはその後の自身による聴解分析で、①で“ourselves”を聴き取れなかった背景について、「enjoyed」の発音に意識が集中したため、直後の“ourselves”の発音に注意が向かなかつたため」と報告している。また学生Bは①で“ourselves”を聞き逃した背景について、「リスニング1回目で“ourselves”の箇所を聞き逃したことにより、後続の“at the party”というひとまとまりの音連続が聞き取れた」と報告している点が興味深い。これらの報告から、「認識の指向性」と「音声群のチャンク理解」という鍵語を見出すことができるものと筆者は考える。以下、それらについて考察してみることにしたい。

まず「認識の指向性」についてであるが、英語リスニングにおいては犬塚(2007b:33-34)で触れたように、聴解者が音声を聴いて瞬時に判断をしなくてはならないため、「反射的知識」が反映されるものと考えられる。その際、音声群のすべてを同時聴解できない場合に、聴解者が聴解の手がかりとなると判断した箇所に意識が集中して向けられるものと考えられる(選択的聴解)。その背景には、(1)短期記憶における容量に限界があるということ、(2)聴覚上の刺激として相対的にプロミネンスが高い部分に意識が向き、その箇所に解析の起動点が置かれやすいということ、(3)聴解者自身のリスニング語彙との親和性、すなわち、聴解者がその音声群になじみがあるかどうか、がその論点として考えられる。

つぎに、「音声群のチャンク理解」について考えてみたい。チャンクの視点から短期記憶の容量制限について論じた研究として芋阪(2002)がある。芋阪(2002:16-17)によると、「既存の知識を利用」してチャンクを作りあげていくことにより、「記憶すべき内容をうまくまとめて容量に負担をかけない」かたちで「容量制限があっても記憶できる情報量を拡大させていくことが可能」であるとしている。《事例1》における学生A・Bは、リスニングの1回目で認識の志向性がはたらいて文末の“at the party”を聴解して記憶の上で確定したあと、2回目のリスニングでは、1回目で聴き取ることのできなかつた空白部分に認識を向けていることがわかる。

次に文例01)における“ourselves”の箇所の聴解プロセスについて考察を加えることにしたい。上記《事例1》における学生A・Bは、リスニング2回目で

“\*ourselves”と書き取り、そして3回目になって正解の“ourselves”にたどり着いている。学生Aは、2回目のリスニングにおける聴解エラーについて、再帰代名詞として「比較的使用頻度が高い“~self”を選んでしまった」と報告している。これは学生の意図を汲み取って言葉を補うとすれば、その学生にとっては再帰代名詞と言えば複数形の“~selves”よりも単数形の“~self”のほうがなじみがあって、2回目のリスニングで“ourselves”のうちの/avəˌsɛlˌ/までが聴き取れたために後半部分の摩擦音の有声/無声の差異には認識が及ばず「反射的」に“\*ourselves”という誤った形を推定してしまったものと考えられる。これは、“ourselves”の箇所をあくまでも語(句)としてのみ聴解しようとしている段階であって、2回目のリスニングにおいてはまだ“we··ourselves”という「構造上の理解」にまで認識が及ばず、文法知識が正しく反映されていない状態にあることがわかる。日本人英語学習者の場合には、英語音声のリスニングにおいては、入力となる音声をもとにそれを構造化して聴解できるところまでには達していないケースが多く、この事例のように要素どうしが離れている場合の「構造化」の成否が、外国語として英語音声聴取する人の場合と英語母語話者との間に見られる決定的な違いであると筆者は考える。

### 3. 2. He won't listen to our advice. (文例06)

次に、文例 06)について、学生たちが書き取ったものの中から、英語音声の聴解判断について考える際に有力な資料となるとと思われる事例を取りあげることとする。

《事例2：学生Cの場合》

- 06) He won't listen to our advice.  
 ①\*He wanted to listen our advice.  
 ②\*He want to listen to our advice.  
 ③\*He want to listen to our advice.  
 ④\*He want to listen to our advice.

文例 06)では“won't” /wɒnt/のところを誤って“want” /wʌnt/と聴き取る可能性のあることは事前に想定していたのであるが、《事例2》のように元の音声にはないはずの“wanted”における“...ed”や“want to”における“to”はいったいどうしてそれがそこにあると認識したのか、以下、学生Cのレポートから、その聴解判断を分析することにしたい。1回目のリスニングで“wanted to”、そして2回目・3回目で“want to”とした根拠について以下のように報告している。

『ウォントゥ』と聴こえたため“want to”が頭に浮かんだが、主語が“He”であったため3人称単数現在に用いる“-s”が必要だと思った。しかしどう考えても/ts/音は聴こえなかったのでやむを得ず過去形の“wanted to”にした。2回目・3回目を聴くことでやはり過去形の音も入っていないと判断し、文法におかしいと分かっているながらも“want to”と判断した。このとき私の頭の中に“won't”という考えは存在しなかった。それはこれまでの学習の中で“won't”を使用する機会がほとんどなかったからである。』

まずここでは“won't”/wount/となるはずのところを“want”/want/として聴き取ったという聴覚的類似性にもとづくエラーがその発端となり、その後、音声面についてはリスニングの回数を重ねるごとにその判断が修正されていくのに対し、文法知識の反映のされ方についてはその判断が誤った形で固定されていく過程をみることができる。これは反射的知識が反映される英語リスニングにおいては、聴解者が、英語音声聴き取る際に、文法よりも全体として何を言っているのかという意味理解のほうに関心の重きを置き、その意味理解は、聴解が十分でない場合には、構造を視野に入れるというよりはむしろ個々の語(句)単位でその意味を拾い集めその全体の意味を推定するということが行なわれているものと考えられる。

#### 4. 結語

以上、本稿では日本語母語話者による英語音声のリスニング実験の結果と、被験者(学生)自身による聴解判断に関するレポート内容を踏まえて、英語音声の聴解プロセスのしくみを質的な観点から考察した。その結果、これまでの取り組みから明らかになったことを再確認するとともに、新たに「認識の指向性」と「音声群のチャンク理解」の問題が追究すべき論点として浮かび上がってきた。日本語母語話者による英語音声の聴解プロセスについては今後さらに考察を深めたいと考えている。

#### 註

- \* 本研究は、平成21年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) [課題番号:21520496, 研究課題名:「英語音声の聴解プロセスにおける日本語母語の干渉に関する研究」] の交付を受けて行なった研究成果の一部をまとめたものである。

## 参考文献

- 石黒昭博 (2007) 『Forest音でトレーニング』, 東京: 桐原書店.
- 犬塚博彦 (2004) 「英語音声のリスニングに関する事例研究—岩手大学教育学部『英語音声学演習』における授業実践—」, 『岩手大学英语教育論集』第6号, 67-74.
- 犬塚博彦 (2005a) 「英語音声のリスニングとその意味理解」, 『東北英語教育学会研究紀要』第25号, 61-72.
- 犬塚博彦 (2005b) 「英語音声のリスニングとその統語処理に関する一考察」, 『岩手大学英语教育論集』第7号, 81-87.
- 犬塚博彦 (2006) 「英語音声のリスニングと文構造」, 『東北英語教育学会研究紀要』第26号, 11-22.
- 犬塚博彦(2007a) 「英語音声のリスニングにおける聴解の精度と安定度」, 『東北英語教育学会研究紀要』第27号, 11-20.
- 犬塚博彦(2007b) 「ボトムアップ処理の視点からみた英語音声の聴解プロセス」, 『言語の世界』Vol.25,No.1/2, 23-38.
- 犬塚博彦 (2008a) 「英語音声の聴解プロセス解明に向けての取り組み」, 『岩手大学英语教育論集』第10号, 81-88.
- 犬塚博彦(2008b) 「リスニング実験の結果にみる英語音声の聴解プロセス」『第34回全国英語教育学会東京研究大会発表予稿集』, 144-145.
- 犬塚博彦 (2009) 「弱母音で始まる英語内容語の聴解のしくみ」, 『岩手大学英语教育論集』第11号, 66-78.
- 苧阪満里子 (2002) 『脳のメモ帳 ワーキングメモリ』, 東京: 新曜社.
- 尾山大 (2007) 『英語の耳づくり』, 東京: ナツメ社.
- 小池生夫編 (1993) 『英語のヒアリングとその指導』, 東京: 大修館書店.
- K.ジョンソン他編 (1999) 『外国語教育学大辞典』, 東京: 大修館書店.
- 白畑知彦他 (1999) 『英語教育用語辞典』, 東京: 大修館書店.
- 竹林滋 (1996) 『英語音声学』, 東京: 研究社.
- 竹林滋他 (1998) 『英語音声学入門』, 東京: 大修館書店.
- Carrell, Patricia L. (1988) *Interactive Approaches to Second Language Reading*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rost, Michael (2002) *Teaching and Researching Listening*. Harlow: Longman.

(岩手大学教育学部英語教育科)